



県民会議会長賞

「おばあちゃんありがとう 大切にくつ下」 梶谷 日暖



わたしには、大切にくつ下があります。

大すきなキャラクターがかいてあって、1年生のころからはいているくつ下です。

でも、親指のところにあながあいて、はけなくなってしまいました。お母さんには「もう、すてて新しいのをはいたら。と、言われたけれど、おばあちゃんは「お気に入りのくつ下なんだね。大じょうぶ。」と言って、やぶれたところをぬってくれました。

おばあちゃんは、やさしくてかっこいいなと思いました。

だけど、また親ゆびの所にあながあいて、とうとうはけなくなってしまいました。今度は、お父さんにも「すてたら。」と言われてしまいました。でも、お気に入りのくつ下だし、おばあちゃんが直してくれたたくつしたなのでどうしてもすてたくなくておばあちゃんならどうするかと考えました。

そして、わたしはビビっとひらめきました。

「くつしたへんしん計かく」

くつしたへんしん計かくっていうのは、くつ下のキャラクターの部分を切りとって、かばんにキャラクターをぬいつけて、オリジナルのかばんを作る計かくの事です。

お父さんやお母さんにも手つだってもらって、ひもがとび出たところもあったけど、なんとかかばんができました。

今度、おばあちゃんにもかばんを作ってプレゼントします。楽しみにまっててね、おばあちゃん。



「家庭の日」賞 「大切なドライブ」

藤井 志音

私の家は母子家庭です。母が女手一つで私と弟を育ててくれています。休みが少ない仕事なので、遠出をすることがあまりありません。そのため、母が休みの時には決まってドライブをします。なぜドライブなのかはよく分かりませんが、恐らく母が車好きで出かけるのも好きだからだと思います。車の中では母が好きな音楽を聴いたり、ライブDVDを見たりして楽しく過ごしたり、色々な話をしたりします。私が友人関係で悩んでいる時は静かに話をきいてくれ、アドバイスをしてくれます。時には、泣いたり、言い合ったり、笑ったりしていました。そういった車の中は私たち三人にとって大切な空間でした。

しかし高校生になった今、部活動で休みが少なく、ドライブの回数が減ってしまいました。そして、二歳下の弟も年頃になり出かけなくなってしまいました。そして、私も部活動で疲れて母のドライブの誘いを断ってしまいました。すると、母の顔が少し寂しそうに見え、すごく後悔をしました。きっと母は楽しみにしていたのだと、この時強く思いました。

来年、私は十八歳になり自動車の免許が取れるようになります。私には免許を取った時に叶えたい夢があります。それは母を乗せてドライブすることです。今度は自分がハンドルを握ってドライブしたいです。



「家庭の日」賞 「思い出の絵本」

K・T



娘が、妻と一緒に赤ちゃんの頃に読んでいた絵本のクリーニングをしていた。

お友達のおうちの赤ちゃんに、絵本をお譲りするのだという。

並べられた絵本たち。久しぶりに見るその表紙から、子どもたちとの思い出が溢れてきた。

どういうわけか、息子がお気に入りだった本は娘もお気に入り、同じ本ばかり読み聞かせをねだられた。

“えー、またこの本か。ずっと、こればかり読んでいるよ。お父さんは全部覚えちゃったよ。”と思いながらも、膝に座って待つ我が子が可愛くて、繰り返し同じ本を読んだものだ。

『いないいないばあ』は怪獣さんが一番人気。ペロペロキャンディーは、何度も破れたから、セロテープが何重にも貼ってある。

『もこもこ』は「プー」から溜めて、「パチン」で一緒に盛り上がった。

あ、この『ぴよちゃん』の絵本は、ひよこの絵が可愛くて、息子が産まれる前に私が買ってきたものだ。その後、絵本に出てる「ぐーぐー・すやすや」は我が家の流行語になったなあ。

クリーニングが済んだ絵本は、見違えるようにキレイになり、お友達のお家にお引っ越しをしていった。

そして、我が家には、まだ絵本が少し残っている。

娘が、「自分がお母さんになったら、赤ちゃんに読んであげたい」と言って箱にしまった絵本たち。『もこもこ』『いないいないばあ』も箱に入っている。

『ぴよちゃん』は私が残した。また、絵本を読む日が来るまで、大切にしておこうと思う。



しまニッコ賞

「真夜中のこいのぼり」

M

私は忘れ物の多い母である。ある日、年少だった双子の息子が口を揃えてこう言った。

「お母ちゃん、僕たちのこいのぼりはなんで作ってないの？」

え？そんなもの作らなきゃいけない？半ばパニックになるが、二人は、自分たち以外は持ってきているという。翌日には保育園に提出しなければいけない。

そして深夜帰宅した夫と大急ぎでこいのぼり作りをすることになった。一番の問題は最適な棒探した。大事にしていたミニトマトだったが、致し方ない。大雨の中トマトの添え木を引き抜いた。緑のテープが巻いてあるが、中は鉄の棒。夫には思いのほか丈夫なその棒を、のこぎりで切ってもらった。子供たちを起こさぬようのこぎりを引く夫の横で、私はこいのぼりの色を塗り、紐をつけた。

翌朝、いつもよりも晴れやかな表情の二人の小さな手には、家族で気持ちよさそうに泳ぐこいのぼり。いつもごめん、忘れん坊のお母ちゃんのせいで。出迎えてくれた先生に

「すみません、私、いつも大事なことを聞き逃してしまって」

とこいのぼり提出が遅れたことを詫びると、先生の顔に「？」が浮かんだ。

「そんなお願いしていませんか？」

完全に双子の勘違いだった。

なぜその発想になったか未だに不明であるが、しかし後にも先にも、あの夜のように夫と二人、協力して何かを成し遂げたことはない。思い出すと笑えてくる、我が家の大事な思い出の一つである。



しまニッコ賞 「魔法のことば」 (氏名掲載不可)

高校へ入学すると同時に始まったお弁当作り。毎朝「お弁当ありがとう。仕事頑張ってるね!」と言い、学校から帰ると「お弁当おいしかったよ。いつもありがとう!」と言って、お弁当箱を洗ってくれる君。照れ臭くていつも「はいはい」としか返事しないけど、その言葉で心が元気になる。手の込んだお弁当でもないし、ちょっと塩コショウしすぎたおかずを入れた日でも、玉子焼きの味をつけ忘れた日でも「おいしかったよ」って言うから、毎日お弁当作りを頑張れるよ。こちらこそ残さず食べてくれてありがとう。

ちょっとしたことで口げんかした朝…いつもの言葉はない。でも、学校から帰ると夕飯を作る私の背中に向かって「今日はごめん」。照れくさそうにボソツと言う君がおかしくて、つい笑った。「母さんも言いすぎたね。ごめんね」君に謝るタイミングをもらった気がした。どっちが大人かな…。

自転車での事故をよく耳にする。自転車は時に凶器にもなる。事故に遭わない、起こさないためにも「気をつけて(学校に)行って、(学校から家へ)おかえり」と見送る私の想いを知ってか知らずかまだ日も昇らぬ暗い中、朝練へ。見送る私には目もくれず、シャカシャカ自転車をこぐ背中に君の成長を感じる毎日。ただただ無事に家に帰って来てくれることを願い、今日も「気をつけて行っておかえりー!!」

これからもしつこくエールを送りながら、君の成長を見守っているよ。



しまニッコ賞 「クリスマスの贈り物」

0・E

子育て期間夫が不在で私はサンタだった。子供と共に行動し見つからない様にプレゼントを準備して手紙を添える。「文字がママに似てる」と言われ、市内の代行サービスを利用すると「消印が松江、なんで?」と不審がられ、海外のサンタからの手紙を発注。

珈琲とサンドウィッチをスタンバイされるのは大変。食後の深夜にキツイ。「よそはクッキーかチョコにしてるよ。」と尝试してみたり。

ついに、息子が十歳頃決定的な出来事の日がやってきた。

なかなか眠れない様子。私は早く寝たい。息子が寝たふりをした事を知らずにプレゼントを置こうとしたその瞬間暗闇で目が合った。目が合った気がしたのではなく、確かに合ってしまった。

息子はもう一度寝たふりをしてくれ、私サンタが部屋を出るとプレゼントを開けていた。

翌朝気まずい私に、息子は「おはよう。昨日夢を見たよ。ママがサンタだった夢!」だけど翌年からサンタさんをお願いすることはなくなった。

四歳の時に、戦隊系の玩具をとっても欲しがっていたのに母サンタが贈ったものは木のおもちゃと地図の絵本だった。

その時の落胆ぶりも忘れられないけれど、その絵本を仕方なく開いたのに、見たこともない国や景色、カラフルな国旗に魅了されて愛読書となり海外への好奇心が広がった。その息子も今年就職が決まりそういう方面で働く事になりそうだ。

母サンタの始まりから終わり。楽しい思い出をプレゼントされていたのは私だったのかも知れない。



入賞

「両親への感謝」

T・K



私は中学校の頃まで両親が苦手でした。でも今では大好きで、生まれ変わってもこの家族でいたいと思うくらい大好きです。

私が生まれてから一年もたたない時に弟が生まれました。小さい頃は年が近いということもあって一緒に遊んだり、一緒にテレビを見たりして仲が良かった記憶でいっぱいです。小学校高学年になったくらいから、弟と比べられるようになりました。その頃から両親が苦手だと思えるようになりました。弟はこうなのに、お姉ちゃんなんだから、と言われ、私は弟と比べられるのがすごく嫌でした。その頃私は、学校のことも悩んでいて、学校に行かないことも増えていた頃で、精神的にも苦しい時でした。私が我慢すれば。などネガティブな考えしかできない私はふとお母さんに名前の由来を聞いてみました。お母さんは「神様から授かった美しく大切な子っていう意味があるんだよ。」と教えてくれました。家に誰もいないある日、母子手帳と私が生まれる前までの日記を見つけました。そこには、お父さんとお母さんがどれだけ私のことを思ってくれていたかがすごく伝わってきました。名前の候補が二十個以上も書いてあったり、日記には、私が生まれてきてくれることをどれだけ楽しみにしてくれていたのか。母子手帳には、私が生まれてからの成長記録や私への思いがたくさん書かれていました。その瞬間涙が溢れてきて両親への思いが変わりました。ごめんなさい。そしてありがとう。



入賞

「お風呂の順番」

M・N



「おかあさん、さきにあがっていいよ」

息子が3歳の歳になったくらいの頃です。私と一緒にお風呂に入っていたときのことでした。身体も洗い終わり、湯船につかり温まってさあ上がろうかとしたとき突然言われました。なぜそう言うのか。聞いた瞬間分かりませんでした。「どうして、先にあがっていいの？」と私が聞いてみると、「おかあさんが、ここからながされちゃったらかなしいでしょ」と息子が答えました。

湯船の栓を抜くと、お湯と一緒に私まで流されるのではと心配してくれるのです。もちろんそんなことはありません。笑だけど、その想像力と息子の優しすぎる気持ちがとても可愛くて嬉しくて。

「わかったよ。お母さんが先にあがるね」と、順番が決まりました。息子が上手に湯船の栓を抜くのを、私は浴槽から出て見守ります。浴槽の中で待っていると、「ちがう!ここから出て」と追い出されることも。もちろん夏も冬もです。「お母さんがやるよ」と言えばそれまでかも知れません。だけど、いつまで続くか楽しみながらお風呂の時間を楽しもうと思います。さて、今夜も流されないように守ってもらおうかな。



「感情を内に仕舞わず表に出すことの大切さ」 桃木 信博

NHK連続テレビ小説「舞いあがれ」では、ドラマの流れの一つに“親子の付き合い方”があるようだ。体が弱く就学が思うに任せない子、考えを言えない子などが描かれ、周囲との関わりの中で自ら成長していくというものなのだ。私の孫は3人。親の転勤で幼稚園、小学校の転校を繰り返し、特に長男は性格も内気なことから友達も少ない。

今年の夏、孫が通う小学校の先生から「お孫さんが、学校を飛び出し皆で探している。校内で弟と喧嘩したのが理由のようだ。」との電話を遠く離れた私に頂いた。親が共稼ぎのため、緊急連絡先の一つとして登録していたようだ。しばらくして両親や先生方の探索の結果、「孫は何食わぬ顔をして家にいた」との知らせを受けた。友達にからかわれたことに立腹した突発的な行動のようだ。

私は、孫の行動に「よくやった」と褒めてやった。私の小さい頃、友達からいじめられたりもしたが、親や周囲になにも言えずにいた。そして、そのまま大人になった。しかし、孫は違った。自分の感情を表に出したことから結果的にその思いが先生に伝わった。私は孫をからかった生徒を責める気持ちはない。感情を直接に孫を出したもので善し悪しの判断ができる年頃でもない。今、孫は5年生。秋の運動会では学年別リレーに選別されたそうだ。この知らせに孫の成長を嬉しく思った。自分の思いを内に仕舞わず外に出す大切さを孫から教わった。



入賞

「おじいちゃんの足と僕の足」 T・M



ある日部活から帰ると、祖父が「足がたくましくなったな」と言って、僕の隣に来て自分の足を見せてきた。その白くてよばよばだがどこかたくましきのある足を見て、祖父と一緒に走った初めてのロードレースのことを思い出した。小学1年生の時、僕は初めて地区民運動会のロードレースに参加することにした。走る距離は大人と一緒に約4kmで当然、小学1年生の僕は走ったことのない距離だった、そこで、昔マラソン選手だったおじいちゃんが僕と一緒に走ってくれることになった。長く走るフォームや呼吸の仕方をたくさん教えてくれた。僕はとてもワクワクしてその話を聞いていた。運動会当日、競技がどんどん進み、ロードレースの前の競技まできた。ワクワクしている僕の所に、手にロープの輪っかを持ったおじいちゃんが来た。そのロープは2人で握って、走っている途中におじいちゃんと僕が離れないようにするために、おじいちゃんが作ってきた物だった。僕は少し恥ずかしかったが、それを握ってスタートラインに立った。ピストルが鳴って一斉に走り出した。やはり、4kmも走ったことが無かった僕はすぐに疲れてしまった。そんな時におじいちゃんは「走りきるぞ。がんばれ。」と言ってロープを引っ張ってくれた。そのときのおじいちゃんは今にも鮮明に思い出せるほど、僕にはかっこよく見えた。僕はその時から走るのが好きになった。



入賞

「強くなったわたしたち」

A・N



我が家には3歳の息子がいます。息子が生まれる前に2度の流産を経験し、もう私は子どもを持つことができないかもしれないと毎日泣いて暮らしたこともありました。そんな辛さを乗り越えて産まれてきてくれたのが息子です。産声を聞いたときには嬉しくて涙が止まりませんでした。しかし息子は低体重出生児で、周りの子に比べると少し小さかったので、せっかく産まれてきてくれたのに、こんな小さな子はすぐ死んでしまうかもしれないという恐怖心が生まれ、何日もまともに眠れず、入院中は夜な夜な看護師さんに泣きついていました。

そんな息子も今年4歳。元気に成長しています。

先日、家族で買い物に出かけたときに息子がおもちゃ屋さんで「これ買うー!!」と大きな箱に入ったおもちゃをレジに持って行こうとしました。「ダメ!買わないから!」と私が箱を棚に戻すと、「いやー買うのー!」と息子は泣き、「買いません。泣きたいならずっと泣いとればいいわ!」と私。ほんの3年前には、どうやれば息子が泣き止むかを必死で考え、悪戦苦闘していたと言うのに…そう思うとなんだか笑えてきました。

このやりとりは、息子と私が力強く成長し、私たち家族が仲良く幸せに暮らしてきたことの証明に他ならないなど。

息子が大きくなるとこんな大変なやりとりもなくなるのですが、今はこんな日々を大切にしていきたいなと息子の泣き顔を見ながら思うのです。